

19 TI-201運動負荷心筋シンチグラフィ24時間像による心筋viabilityの評価

滝 淳一, 分校久志, 中嶋憲一, 村守 朗, 松成一朗, 谷口 充, 利波紀久, 久田欣一(金沢大学核医学科)

虚血性心疾患における運動負荷心筋シンチグラフィでの心筋viabilityの評価に対する精度向上のために24時間像追加の有用性について検討した。運動負荷3時間後像で再分布のないfixed defect(FD)を有する32例に対して24時間像を追加した。21例においてはPTCA,CABG施行後にも負荷心筋シンチグラフィを施行した。3時間でFDを示した症例の50%において24時間像で再分布を認めviableな心筋の存在が示唆された。24時間像で再分布を認めた90%にPTCA,CABG後にTIの明らかな集積増加を示し壁運動の改善もみられた。24時間像で再分布を示さなかったものの65%ではTIの集積増加を認めなかった。24時間像は心筋viability評価の精度向上に有用であった。

20 運動負荷T1・201心筋SPECTにおける逆再分布現象の検討

渡邊 潔(東京通信病院循環器科)

運動負荷T1・201心筋SPECT(T1Ex)に出現する逆再分布現象(RR)の検討のため虚血性心疾患を疑い冠動脈写を施行した166名について同時期に行なったT1Exを視覚判定し造影所見と対比検討した。シンチ所見は前壁中隔、側壁、下壁、後壁の部位にわけてそれぞれストレスディレイイメージについて判定した。冠動脈硬化による有意狭窄病変を示す群(狭窄群)は89名、そうでない群(非狭窄群)は77名であった。狭窄群にはR-Rは21名(24%)、非狭窄群には38名(49%)で有意であった($P < 0.01$)。狭窄群でR-Rを示す者は他の心筋局所に再分布を伴うものが多く18名(86%)認め、RR単独所見は3名(14%)と少なかった。T1ExにおけるRRは有意冠動脈狭窄による直接的な虚血性変化を表すものでないと判断した。

21 急性心筋梗塞症における201-Tl安静時心筋シンチグラフィ逆再分布現象の意義

山岸広幸・板金 広・秋岡 要・大村 崇・飯田英隆・戸田為久・寺柿政和・安田光隆・竹内一秀・武田忠直(大阪市大第一内科)越智宏暢(同 核医学研究室)

急性心筋梗塞症における安静時心筋シンチグラフィ逆再分布現象は、急性期梗塞血管再疋通時にしばしば経験され、心筋salvageの指標として有用であると報告されている。しかし、その臨床的意義は不明の点が多い。本研究では、主に急性期にinterventional therapyを施行しなかった急性心筋梗塞症を対象に安静時心筋シンチグラフィを施行した。逆再分布現象の有無をSPECTにて診断し、各臨床諸指標(臨床症状、心電図、心臓超音波検査、冠動脈造影、運動負荷心筋シンチグラフィ)と対比検討することにより、その臨床的意義と機序について考察したので報告する。

22 急性心筋梗塞症発症1カ月後の安静時T1心筋SPECT像における梗塞部逆再分布現象の臨床的意義

馬本郁男、杉原洋樹、原田佳明、志賀浩治、勝目 紘、中川雅夫(京府医第2内科)首藤達哉、高倉正祐、岩波 充、辻 光、北村 誠、宮尾賢爾(京第2日赤)

急性心筋梗塞(AMI)発症1カ月後の安静時T1心筋SPECT(R-T1)における逆再分布現象の意義を検討。Dual SPECTにて梗塞部位を同定したAMI37例を対象とし、AMI1カ月後にR-T1を施行し、初期像および遅延像を得た。視覚的に固定灌流低下群(PD)19例と逆再分布群(rRD)18例に分類した。rRD群では梗塞部Wash out rateが健常部より高く、Dual SPECTでoverlapを示す例が多く、初期像の梗塞部%TI uptakeは大、またrRD群はPTCR成功または自然再疋通例が多く、壁運動は比較的良好であった。AMI1カ月後R-T1のrRDはsalvageされた心筋に高頻度に見られる現象である。

23 陳旧性心筋梗塞における運動負荷T1-201心筋シンチグラムの再分布と残存虚血

内藤丈詞、山本一博、朝田真司、平山篤志、南都伸介、三嶋正芳、児玉和久(大阪警察病院心臓センター)佐々木次郎、田中淳司、長谷川正和(同放射線科)

松村泰志、北畠 顕、鎌田武信(大阪大学第一内科)

陳旧性心筋梗塞における運動負荷T1-201心筋シンチグラムの再分布が残存心筋虚血を示すかを、ペーシング負荷時の局所乳酸代謝と対比し検討した。陳旧性前壁中隔心筋梗塞80例(男女比 58:22、平均年齢60歳)について運動負荷T1-201心筋シンチグラムを施行し、再分布量を定量的に示した△%Tl-uptakeと虚血の指標である心房ペーシング負荷試験における乳酸摂取率とを比較し検討した。梗塞部位において、再分布のある例では虚血が存在する例と存在しない例があるが、△%Tl-uptakeが10%を越える高度の再分布例では虚血の存在が示唆された。

24 安静時タリウム心筋シンチグラフィdelayedimageの臨床的検討

堀川 歩、勝山直文、新里早奈枝、久志 亮、諸見里秀和、山口慶一郎、中野 政雄(琉球大・放)、仲里政泰(琉球大・3内)

心筋梗塞例の真心筋のviabilityの評価には現在の方法では多少問題がある。今回、心筋梗塞25例を対象に安静時負荷心筋シンチ delayed imageの有用性について検討した。検討はブラー像、SPECT像、及び Bull's eye imageにて行なった。梗塞25例中15例に、何らかの再分布またはwashout ratioの著明な低下が認められた。それらの殆どは急性心筋梗塞例と側副血行路例であった。また、多枝病変例では全体にwashout ratioの著明な低下が認められた。安静時心筋シンチの早期像のみでは心筋のviabilityを過小評価する傾向にあり、安静時 delayed imageを撮ることは臨床的に有用と考える。